

[翻訳]

イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年) (9)

工藤 康弘・田島 篤史・吉田 瞳訳

はじめに

本稿はイエルク・ヴィクラム (Jörg Wickram) の『少年の鑑』(*Der jungen Knaben Spiegel*, 1554) 本文第二十一章および第二十二章の翻訳である¹。本稿の共訳者である工藤と田島は「大阪初期新高ドイツ語研究会」を発足させ、2014年3月より活動を始めている。本稿はその成果の一部であり、すでに本作『少年の鑑』のタイトルページ、献辞、本文第一章から第二十章と作品・作者の解説は発表しているため、関心を持たれた読者諸賢はそちらを参照していただければ幸いである²。なお2018年3月から吉田が本研究会に参加しているため、本誌第63号から共訳者として加わっていることも付言する。

翻訳にあたり底本としてハンス＝ゲルト・ロロフ (Hans-Gert Roloff)

1 Wickram, Jörg: *Der jungen Knaben Spiegel*, Straßburg: Frölich, 1554.

2 工藤康弘・田島篤史訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)」、『関西大学西洋史論叢』第17号、関西大学大学院文学研究科史学専攻西洋史専修、2014年、20 - 32ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年) (2)」、『独逸文学』第59号、2015年、231 - 241ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年) (3)」、『独逸文学』第60号、2016年、101 - 114ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年) (4)」、『独逸文学』第61号、2017年、133 - 143ページ。同「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年) (5)」、『独逸文学』第62号、2018年、33 - 44ページ。工藤康弘・田島篤史・吉田瞳・柴亜矢子訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年) (6)」、『独逸文学』第63号、2019年、77 - 89ページ。工藤康弘・田島篤史・柴亜矢子訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年) (7)」、『独逸文学』第64号、2020年、33 - 43ページ。工藤康弘・田島篤史・吉田瞳・柴亜矢子訳「イエルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年) (8)」、『独逸文学』第65号、2021年、143 - 158ページ。

の編纂によるヴィクラム全集を用いた³。またゲルトルート・ファウト (Gertrud Fauth) およびミヒャエル・ホルツインガー (Michael Holzinger) による二冊の校訂版も参照した⁴。前者はヴィクラム研究の第一人者による校訂版であり、前書きと後書きにヴィクラムおよびその作品の詳細な解説が付されている。後者は1903年のヨハネス・ボルテ (Johannes Bolte) による一連のヴィクラム作品の校訂版を、ホルツインガーが作品ごとに廉価なペーパーバック版で復刻したものである。このホルツインガー版はコンパクトで参照しやすい反面、原典に収められている木版挿絵の一切が省かれているため、作品の臨場感といった点ではやや物足りなさを感じる。以上に加えてバイエルン国立図書館所蔵の初版テキストがオンライン公開されているため、そちらも適宜参照した⁵。

なお原典には章番号もコンマやピリオドや段落の切れ目もない。ファウト版およびホルツインガー版は独自に章番号を付し、文章を区切り段落分けをしている。本稿ではこれら二版の章番号に従いつつも、文章の区切りと改行は独自に行った。また本稿中に挿入している挿絵はファウト版の該当箇所をそれぞれの典拠としている。

3 Wickram, Georg: *Sämtliche Werke, Bd. 3: Knaben Spiegel; Dialog vom ungerathnen Sohn*. In: Roloff, Hans-Gert (Hrsg.), Berlin: W. de Gruyter, 1968, S. 1-121.

4 Wickram, Jörg (Verfasser), Gertrud Fauth (Hrsg.): *Der Jungen Knaben Spiegel; Mit dem Dialog: Eine Warhaffige History von einem ungerathnen Son.*, Straßburg: Karl J. Trübner, 1917; Wickram, Georg (Verfasser), Michael Holzinger (Hrsg.): *Der jungen Knaben Spiegel*, Berlin: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2013.

5 <http://daten.digitale-sammlungen.de/~db/bsb00008420/images/> (2021年12月13日最終アクセス)。

第二十一章

フリートベルトとフェーリクスが、バグパイプ奏者のヴィルバルトを夜のうちにボースナへと連れていき、翌朝、幾名かの友人や領主たちと老騎士を客人として招いたこと。ヴィルバルトは隣の部屋で歌を歌い、バグパイプを吹いていたが、自分がどこにいるのかわかっていなかったこと。



今やすっかり用事も終わり、皆が故郷への帰り支度をしていました。フリートベルトとフェーリクスは彼らのバグパイプ奏者に、自分たちと一緒に来るつもりはないかと尋ねました。そのバグパイプ奏者はすっかり満足して、自分は馬に乗せてもらえるのか、それとも歩いて行かねばならないのか、ということのほかにも何も尋ねませんでした。もちろん二人は彼に馬をあてがってやりました。さて、フリートベルトとフェーリクスは荷造りをすべて終えて、宿屋の主人に支払いを済ませると、故郷までの最寄りの道を馬で行きました。道中、二人はバグパイプ奏者とともにいて、大きな喜びをかみしめていました。一行が二日のあいだ馬で旅を続け、ヴィルバルトが下男たちと打ち解けると、あなた方のご主人

たちはどこにお屋敷を持ってらっしゃるのですか、と尋ねました。しかしこの質問に答えることは、あらかじめ彼らの主人たちから禁じられていました。そのため下男たちは、言葉巧みにヴィルバルトを煙に巻きました。このお人好しの愚か者は、言われたことすべてを信じたのでした。

今や一行はボースナから遠くないところにいました。一人の従者が、到着を知らせるために、前もって遣いに出されていました。一行が夜のうちにやってくるだろうから、門のところで待っておくように、とのことでした。ヴィルバルトは密かに頭の中で考えました。「日中にも時間は十分あるのに、夜になってようやく町に入ろうとしているなんて、とてもあやしい人たちかもしれないぞ。二人がよからぬことをたくらんでいるんじゃないかと、本当に心配だ。なにか人脈があって、例えば僕を商人に送りつけて、その商人がガレー船に僕を鎖で縛りつけるんだ。二人は僕が若くて頑強だとみている。そんな僕みたいな若者には高値がつく。ひょっとすると彼ら自身もそんな商品を扱っている商人なのかもしれない。だとしたら、僕は森で狼に喰われた方がよかった。そうでなければ、八つ裂きにされた家畜のところで、親方が僕を見つけて、木に吊るしていたらなあ。長く苦しんで死ねないよりも、ひと思いに死んだほうがマシだろうから。」このような考えがヴィルバルトをととても強く覆っていたので疑心暗鬼になってしまい、何事にも用心せずにはいられませんでした。フェーリクスはすぐさまこのことに気づくと、ヴィルバルトの片方の腕をつかんで、口元に笑みを浮かべながら言いました。「ハインツ・オントロースト絶望のハインツよ、男らしくしていなさい！明日お前はますますもって毅然としていなければならぬのだぞ。」こう言って、フェーリクスたちはヴィルバルトのことをさらにかかったのでした。

さて一行は頃合いだと思うと、馬にまたがり、ボースナへと駆けていきました。今や月あかりはほとんどなく、その下では何も見えませんでした。しかし一行がごく近くまで来ると、ヴィルバルトはずっと以前にその町を見たような気がしました。それでも彼は、この町がボースナだとは思わず、フリートベルトになんという町なのかと尋ねました。フリートベルトは答えましたが、まったく別の名前を教えました。しかしそれでヴィルバルトは満足したのでした。

一行は、フェーリクスと彼の妻が暮らしている姑の家にやってきました。しかしどこにいるのかヴィルバルトがまったく気づかないように、いっさいのことが仕組みられていました。一行は手厚く迎え入れられました。先に馬で来ていたフェーリクスの従者が、ことの次第を姑と妻に報告していたからです。そういうわけで彼女たちは、自分たちの幸福のすべてが、このヴィルバルトからもたらされていることをよくわかっていました。とはいえヴィルバルトにとっては、その幸福が彼女たちほど大きなものではありませんでした。

フリートベルトは馬から降りるとブーツを脱ぎ、老騎士に別れを告げ、皆でその夜をバグパイプ奏者とともに大いに楽しく過ごすため、妻とともに義兄弟フェーリクスのもとに行きました。つまりフェーリクスのもとではご馳走が用意されていたのです。皆が席につく段になると、フェーリクスはバグパイプ奏者を上座に、その隣に若い女性二人を座らせました。彼女らは二人とも、ヴィルバルトが何者か知っていましたが、そのような素振りはまったく見せずに、ヴィルバルトと大いに楽しんだのです。「全能の神さま」とヴィルバルトは思いました。「今から何が起こるんだろう？この御仁らは僕に十分な礼節と名誉をお与えくださるが、まったく酷いことになるか、本当に素晴らしいことになるかのどちらかだろう。ああ、何か悪いことが起こるのなら、その前にたっぷりとお楽しみしたいものだ。」

皆で楽しく飲み食いしたあと、フェーリクスが姑に言いました。「義母上、貴方は私がここにどんな客人を連れてきたか不思議に思わないのですか。」^{ははうえ}「いいえ、まったく。」と彼女は言いました。「と言いますのも、見たところ彼は流しの楽師だからです。彼のバッジがそう示しています。」「ええ、まさに。」フェーリクスは言いました。「これ以上のバグパイプ奏者をあなたは知らないでしょう。私の言葉を信じてもらうため、彼のバグパイプを持って来させてください！きっと驚きますよ。」まもなくヴィルバルトのもとに頭陀袋が運ばれてきました。ヴィルバルトは自身の遍歴についてバグパイプを奏で歌い始めました。女性たちはその演奏を十分楽しみ、とりわけ次の日に、ヴィルバルトが父親に会ったときどう反応するか心待ちにしました。その夜も今や半ばを過ぎ、おのおのは翌日を楽しく過ごせるよう、休もうと思いました。

朝が来てフリートベルトとともに老騎士が起床すると、老騎士ははじめに旅がどうだったか尋ねました。フリートベルトは嬉し気に微笑んで答えました。「最愛なるご主人さま、我々の素晴らしい旅について聞いていただきたく存じます。なぜなら、偶然、私たちは最愛の兄弟であり、あなたの息子であるヴィルバルトを、たいへん奇妙な状態で見つけたからです。あなたをご覧になったらいくら驚いても驚きたりないでしょう。近々そうなることを願っています。」善良な老人ゴットリーブは、息子への大きな怒りを感じましたが、フリートベルトからあらましを聞くと、父親としての心が呼び起こされ、その目から涙が溢れました。老騎士はヴィルバルトに大いに同情し、その場でフリートベルトに、息子を赦すことを認めました。ただし、下男として自分のもとに住まわせることにしました。というのも、ヴィルバルトはとくに父親の財産を使い果たしていたからです。フェーリクスはそのあいだに、幾人かの領主と友人を客として招くため、必要に応じてすべてを準備しました。フェーリクスが新しい知らせを伝えると約束したため、彼らは喜び勇んでやってきました。たいへん愉快的な食事が催され、そこではある者は大いに笑い、またある者は泣きました。というのも、老騎士がかなり遅れて食事の席に現れたからです。父親がヴィルバルトの視界に入るまで、彼はそれが誰だか気づきませんでした。父を前にして初めて気づいたのでした。

第二十二章

フェーリクスとフリートベルトが愉快的な食事を準備し、そこに善良な領主と友人を何人か招待し、同様に老騎士ゴットリーブを招待した。ゴットリーブが食事の途中で席を離れたこと。ヴィルバルトが中へ呼ばれ、食卓に座らされ、しばらくしてゴットリーブが広間にやってきて、
そのあと起こったこと。

客として招かれた領主と良き友人たちは妻同伴でやってきました。フェーリクスは隣の間で召使いたちのために食卓を用意させました。召使いたちの中にはバグパイプ奏者もいました。フェーリクスはバグパイプ奏者に、仲間たちにはいい仕事をしてみせ、また隣にいる諸侯と客人

たちが楽しい気分になるように、ときどきバグパイプも聴かせてやってくれと命じました。ヴィルバルトはそれを承知し、食事が運ばれるたびに、それに合わせて陽気に歌い、バグパイプを演奏しました。



さて、食事も半ばにさしかかったとき、老騎士が食卓から立ち上がりました。その意図は彼自身とフリートベルトとフェーリクス、その妻たち、その母親以外、誰も知りませんでした。老騎士が出ていくとすぐ、フェーリクスが言いました。「皆さん、よろしければ私たちの楽師を中へ入れたいと思います。彼から皆さんにおもしろいことをお聞かせします。この食事が終わる前に、彼の口から不思議な冒険譚を聞くことになり、彼が誰なのかも知ることになりましょう。」

皆この提案をたいへん気に入りました。まもなくフェーリクスがバグパイプを持った楽師を食卓に連れてきました。彼がしばしばバグパイプを演奏していると、フェーリクスが自分の歌を伴奏なしで歌うようにと促しました。何事にも従順なヴィルバルトは大きく澄んだ声で歌いましたが、自分の父親がすぐ近くにいることは予期していませんでした。父親

は忍び足で広間に戻り、女性たちのいる食卓に座りました。見つからないように、息子には背を向けていました。招待された人々からは大きな笑い声が起きました。というのも、ヴィルバルトが今やすっかり酔っ払い、自分の悩みを皆忘れ、ほとんど道化者になっていたからです。これには善良な老騎士も密かに笑わずにいられていませんでしたが、しかしヴィルバルトには事情を知られないようにしました。

さて、フリートバルトはこの善良なバグパイプ奏者がそろそろ自ら自分を明かすときが来たと思い、言いました。「^{ハインツ・オントロースト}絶望のハインツよ、どうか本当のことを言ってくれ、お前や私たち皆が今どこに、どの国にいると思うか。お前もこの仕事にずっとしがみつки、またそのような下男の暮らしに満足したいのか、それともまた父親の家に帰ることを望んでいるのか、もしそうなら恥ずかしがらずに私たちに言ってくれ。私たちはお前を助け、力になりたいと思っている。その前にお前は父親の名前、そしてお前が生まれ育った国と町の名を言わねばならぬ。」

ヴィルバルトは大きなため息をつきながら、話し始めました。「最愛にして、最も誠実なるご主人さま。あなたさまがわたくしにしてくださいださったこの親切なお申し出に、どうすれば報いることができますでしょうか。わたくしがしでかした『善き行い』は、言わないでおきます。わたくしがあなたさまのもとに留まりたいかとお尋ねになったことにお答えします。そのようなあなたさまのお慈悲がこの身に起こるならば、いつの日かわたくしは神さまに報いることができます。ですが、愛する父上のもとで暮らすことが、わたくしにとってより好ましいことかとお尋ねなので、このようにお答え申し上げます。愛する父上がわたくしをご寛恕くださるのを、神さまがお許しになるなら、この世でわたくしに起こりうるこれ以上の喜びは存じ上げません。父上の息子としてではなく、買われてきた下男として、喜んで自らを父上の従者たちの中で、もっとも卑しい者だとみなしましょう。わたくしが何者であるか、そしてわたくしの祖国と父上の名前とをおわかりいただくために、誠実な老騎士である私の父上がボースナで暮らしていること、そしてわたくしこそが、ウラディ斯拉ヴィアで高貴なお方があなたさまにお話ししたという放蕩息子のヴィルバルトであることをお知りおきください。しかしわたくしは、自分のことが皆に気づかれるかもしれない、というたったそれだけ

の理由で名前を変えておりました。もしわたくしがそのような苦難の只中をさまよい歩いてきたということが誠実な父上の耳に入れば、父上はこのことをたいそう気に病み、それがもとで病気になるほどお怒りになるでしょう。老いた者にとって、怒りよりも害あることなど何もなかるうことは、明白でございます。わたくしが父上の病気の原因になるなら、どうして神さまに申し開きしましょうか。愛する母上が世を去ったのは、あなたさまがその高貴なお方からお聞きになった通りでございます。お悲しや、わたくしは母上の痛ましい死に責任がございますゆえ、この哀れな魂とともにどこへ行けばよいのでしょうか。」

ヴィルバルトはそうのように言うと、ひどく泣きだしました。それにつられて皆も一緒に泣き出しました。フリートベルトは気を取り直すと、次のように言いました。「さあ、親愛なるヴィルバルトよ、元気を出せ！お前の父であるお方を私は知っている。まもなくそのお方に会わせてやる。」騎士ゴットリーブはこれ以上耐えられず、座っていた食卓から立ち上がると、息子のところへ行き、心を痛めて言いました。「おお、放蕩息子よ、わしがかつてお前を育てたことは、なんと悲しきことか！ああ、なにゆえお前は幼いうちに死んでしまわなかったのか。そうであれば、お前が母親の死の原因にもならなかつたらうし、恥知らずにも自堕落に浪費されたわしの莫大な財産が、そこまで喰いつぶされずに済んだらうに。」ヴィルバルトは最愛の父が話す声が聞こえたので、大きな驚きのあまり、自分がどこにいるのかわかっていませんでした。まるで石であるかのように、まったく言葉が出ずに座っていました。ヴィルバルトは何一つ答えることができず、逃げることもできませんでした。そしてゴットリーブの言葉もまた、喜びと悲しみのあまり、途絶えてしまいました。

聡明で思慮深いフリートベルトは、どうすれば二人を慰めることができるだろうかと考えました。「厳格なる父上」と彼は言いました。「お願いでございます。お怒りをお鎮めください。そしてこれらのことに対処できるかをお考えください。亡くなった人は決して戻ってはきません。閣下の奥方は、不幸、不安、労苦すべてに打ち克ち、永遠なる生のうちにいらっしゃるのです。無遠慮に浪費を重ねたヴィルバルトは、貧困の中でその代償を支払いました。悪童ロタールも、数多くの悪行の

ゆえに、ならず者には必ず報いがくるように絞首台に吊るされました。厳格なる閣下、それゆえ我が愛する兄弟であり仲間でもあるヴィルバルトに、どうかお慈悲をお与えください！彼はあなたの年老いたあと、大きな助けとなりましょう。ヴィルバルトがよこしまな心を決して抱かぬほどに、貧しさ、不安、労苦が彼を賢くしたのです。」

この言葉によって、ヴィルバルトはいくらか元気づけられ、食卓から立ち上がると、父の足もとへひざまずき、そして言いました。